

平成14年4月

鳩摩羅什の鬘まげ



森 一 久

國前寺（広島市）は我が家の菩提寺で、その境内と背後の二葉山一帯は、私の腕白時代の恰好の遊び場だった。その本堂の一隅に、正面の日蓮像とは一風違った、身丈二尺ほどの細面の端然たる木製の坐像が有り、子供心にも何となく気にかかってはいた。戦後、貫主足田英政氏から教えられた事だが、これは、日本唯一の、中国最大の仏典翻訳家、鳩摩羅什（三四四―四一三）の像、何故ここに有るのか判らぬが、学者方の鑑定では中国南部の素材・彫刻、とされているものを知った。

國前寺は、日蓮が囑望した末弟子日像が、船で遍歴の途次（一三四〇年）開いた寺。広島藩主浅野家とも縁深く、「不施不受」を護持して幕府の寄進を断った時も、その庇護で生き残ったという、骨太の寺である。

鳩摩羅什は中国の四大訳経家の中で最古の人、五十七歳にして後秦の王に迎えられ、長安・草堂寺で三千人もの訳経師を育て、十年足らずの間に法華経など何百の梵語の經典を、実に流暢な中国語に訳した。小学生愚考するところ、勿論羅什さんの責任ではないが、この「流暢さ」の故に、日本では多くそのまま使われ、大衆は仏教の真髄に触れ難く、日本仏教の現状（死者儀礼のみ目立つ）を招いた一因となったのではないか。閑話休題……

さて、英政師は「西安の草堂寺には鳩摩羅什の像が無いというので、原爆で残った松の根で、当寺の像をもとに彫刻し、平和の念を込めて寄贈しようとしたが、日本の「別派」から寄附があり、その金で既に羅什像を作製した由。当寺の像の写真も参考にしたようだが、『髻（マゲ）があるのはおかしい』という議論があり、推測から制作したと聞いているが……」と、日蓮の著書

『撰時抄』を頂いた。

羅什は、仏教に造詣深い語学の天才として、当時の中国の歴代の王の垂涎の的であり、その彼が西安に招かれた経緯と、同地での生活振りを記した箇所を指し示された。私は頂いた『撰時抄』を書棚に仕舞ったまま、半ば忘れかけていた。

二つの像を追って

二十年ほど前から、仕事の関係で中国訪問の機会が多くなった。そして、施設訪問の中継地として西安に立ち寄る機会があり、その郊外（陝西省戸県草堂鎮）の同寺を、豪雨ぬかるみの中訪れた。高齡の方丈（住職）釋宏林師は風邪気味の由で挨拶のみにして、監院（執事長）釋諦性師に寺院を案内してもらった。そこで初めて見た鳩摩羅什の像は、國前寺のものとは似ても似つかぬ、豊かな体軀の、頭巾をかむった坊主の姿。先方も國前寺の像のことは知っていたが、「羅什がこんな姿のはずはない」と、同師が西安に迎えられてから自由な俗人の生活をしていたという逸話等々を、（臆面もなく）まくし立てる。諦性師らは、そんなことより、鳩摩羅什師の縁に結ばれて、日本から遠路は

るばる来てくれた事への喜びが先にたったようであった。私は「この次は是非泊まってゆっくりして下さい」という言葉に送られ、北京に戻った。

趙僕初師にも直訴

中国仏教協会会長趙僕初師（共産党常任委員）に、「原爆と仏教」という題目で面会をお願いしてあった。北京飯店の私の部屋にお弟子さんを入れて来られたのは、恐懼至極であった。この方との面会の経緯と御話の中身は、ここでは割愛するが、西安の興奮が未だ納まっていなかった私は、羅什の二つの像の事を、つい趙師に言い付けてしまった。同師は温容に笑みを浮かべられつつ、「見事に復興された広島をもう一度訪問したい。そして國前寺の羅什像に案内して下さい」との言葉を残して辞去された。同師は一昨年逝去され、望みが叶えられなかったのは、誠に心残りである。

目から鱗、両寺の交流始める

その後私は、三度同寺を訪れたが、その度に草堂寺の境内に新しい建物、門前に売店と、観光地の風情になるのが寂しく、その上それが総て、（時には何百人の）日本人の置いていく「お布施」によるものと聞き、

日本の協力は「何時もお金か」と憂鬱になった。それに不思議なことに、私の訪問の時は、いつも豪雨、膝までつかぬぬかるみの中、まるで天の怒りに触れているかの如し。釋宏林師は「森さんはいつも嵐と共に来り、風の如く去る」と言いながら、歓迎してくれる。

だが、同寺の皆さんの顔付きは、最初会った時と同じで、微塵も精神の「汚染」は見受けられない。これらのことは、何か発想の転換を促しているように思われてきた。私は目から鱗が取れたような心地で、両寺の像の違いを追求するなどよりも、もっと大事な事がある、それは、ささやかながら、両寺の交流を通じて、中国の仏教ないし仏教徒の現在の姿を知ることの意義である、と思うようになった。

國前寺と草堂寺は、友好覚書を結んで、相互訪問から始めることとした。まず國前寺側から執事長正田英親師が私ら五人と共に、一九九九年三月草堂寺を訪問。この日は打って変わっての晴天、数十人の護法居士（信徒のこと）総出の歓迎を受けた。そこは、釈迦の教えに近く、寺は墓とは全く無縁、居士の奉仕に支えられて生きていた。同年十一月、草堂寺から宏林・

諦性の両師と、奇しくも我々の訪問日に寺に入った若い理性師の三人を、國前寺が広島に招待。盛大に鳩摩羅什の遺徳を偲ぶ法要を営み、共に八十五歳の両寺の貫主がめでたく初会を果し、京都にも案内した。森家の墓前で読経して貰い、それが「般若心経」と判り、英親師に渋い顔をされるなど、両地では、実に多くのエピソードを経験したものである。

中国の仏教は何処へ

草堂寺は、格で言えば「末寺」に属しているようであるが、その後、この交流も契機となって、敷地を少し広げ、「仏教学院」として新たな出発を準備中という。「おめでとう。それこそ、羅什の遺志の継承。カリキュラムが出来たら知らせて欲しい」などと、今後は学問的な交流に繋がたいと考えている。同寺との交流を通じ、中国の寺や僧侶の状況は、日本とは全く違うことを知った。それと同時に私の関心と期待は、生産主義のまま経済の自由化を進めている中国において、特にその精神文明の中で、今後仏教がどのような位置を占めて行くかということにある。

（社団法人日本原子力産業会議副会長）